

完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 福井県福井市大手3丁目17番1号
管理機関 福井県
代表者名 知事 杉本 達治

令和4年度マイスター・ハイスクール事業に係る完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和4年4月1日（契約締結日）～ 令和5年3月31日

2 管理機関

①管理機関（市区町村・都道府県）

ふりがな	さかいし そうごうせいさくぶ
管理機関名	坂井市 総合政策部
代表者職名	次長
代表者氏名	三上 寛司

ふりがな	あわらし そうぞうせんりやくぶ せいさくこうほうか
管理機関名	あわらし市 創造戦略部 政策広報課
代表者職名	課長
代表者氏名	堀江 紀幸

②管理機関（産業界）※2団体以上ある場合は、適宜、欄を追加して記入してください。

ふりがな	かぶしきかいしゃ ふくいぎんこう さかいちょうしてん
管理機関名	株式会社 福井銀行 坂井町支店
代表者職名	支店長
代表者氏名	竹島 久敬

③管理機関（学校設置者）

ふりがな	ふくいけん
管理機関名	福井県
代表者職名	知事
代表者氏名	杉本 達治

3 指定校名

4 事業名

学科横断型DX研究による次世代産業人材育成体制の構築

5 事業概要

(1) 企業との関り（産業の現場を見る、聞く、感じる、考える）

- ・1年生の全8コースには企業等訪問（自分が学ぶ専門に近い分野）・企業等による出前授業（自分が学ぶ専門分野と専門外の分野）の実施
- ・2年生には企業等訪問（自分が学ぶ専門分野と専門外の分野）並びに7コースでグローバル企業訪問の実施
- ・企業等の訪問では産官学が一体となって、次世代地域産業人の育成体制を構築する。生徒には、デジタルデータを活用した産業社会の急速な変革を見据え、地域の企業の現場を生徒の目で見て感じる取り組みを実施した。
- ・企業からは以下の内容を中心に説明を受け、生徒が考えられる内容を盛り込んだ。
 - ①DXを取り入れた技術革新やオンリーワンの技術の説明
 - ②その産業の状況と課題
 - ③社会への貢献
- ・すべての企業が企業理念として、利潤追求だけではなく持続可能な社会に向けての貢献も掲げている。そのような企業のステータスも生徒たちに理解させ、就職活動とは一線を画し、自分たちの学校での学びが地域にどのようにつながっているか、つなげていけるか、そして地域に貢献できるかを考えさせる内容にした。

(2) 1年全生徒を対象に、1単位の学校設定教科「ふくい産業」の実施

観光およびプロダクトデザインの高度な専門知識を有する産業実務家教員2名が、授業を担当し、まとめとしてフィールドワークおよびデザイン作品制作を行った。観光分野の学習を通じて地域の活性化や将来の起業に関する気づきを得ることや、デザインの学習と作品制作を通じて、情報を端的に伝える基礎的な考え方を学習した。

(3) 3年生が学習のまとめとして取り組む、課題研究交流会、企画研究発表会を実施

課題研究交流会を6月22日に実施した。3年生が自分の所属コース以外の課題研究の様子を見学し、その中で他コースの学びについて質問するなど、コース間の交流を図った。他コースの学びから刺激を受けて自分の課題研究を考える機会となった。

企画研究発表会（企画研究は課題研究の中で、マイスター・ハイスクールの予算をつけた研究）は、12月17日（土）に実施した。全校生徒が視聴するだけでなく、地域の方、地域の中学生3年生、保護者、この事業で支援を受けている企業の方々を招き、生徒の主体的な運営で行った。

(4) マイスター・ハイスクール事業を支える学校改革

マイスター・ハイスクール事業が砂上の楼閣にならないためにも、今年度は生徒活動概念図にある「根の部分」の充実を図った。「学びに向かう指標」坂井高校スタンダード～7つの矜持～の作成、マイスター通信（第6号～第9号）による地域や地域の中学校への広報を実施した。

また、今年度は、文部科学省の支援もあり、伴走者支援を行う株式会社ソフィアの指導を受けてのPR動画、PRパンフレットの作成を行った。

評価に関しては、すべての研修において生徒用のレジュメを作成しメモが取れるように配

慮した。それを基にタブレットから振り返りのルーブリック評価を行い、生徒の変容を探ってきた。マイスター・ハイスクール事業全体に関しても、生徒の変容がわかるような「問い」の設定を研究している。最終年度に向けて、引き続き取り組んでいく。

6 学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 開設している ・ 開設していない
- ・教育課程の特例の活用 活用している ・ 活用していない

7 意思決定機関の体制（マイスター・ハイスクール運営委員会）

氏名	所属・職
竹島 久敬	福井銀行坂井町支店 支店長
三上 寛司	坂井市総合政策部 次長
堀江 紀幸	あわら市創造戦略部政策広報課 課長
山崎 良成	福井県教育委員会 副部長（高校教育）
半澤 政丈	坂井市商工会 会長
赤尾 政治	あわら市商工会 会長
大久保 貢	福井大学 地域創生推進本部 教授
森川 峰幸	福井県立大学 創造農学科 教授
内藤 俊治	坂井高等学校 校長

8 事業推進機関の体制（マイスター・ハイスクール事業推進委員会）

氏名	所属・職
三村 友男	前田工織株式会社 監査役 マイスター・ハイスクールCEO
市橋 憲	株式会社福井銀行坂井町支店 支店長代理
斉藤 立海	坂井市総合政策部企画政策課 課長補佐
藤田 由紀	あわら市創造戦略部政策広報課 参事
浅原 雅浩	福井大学 教育学部 教授
蓑輪 美智子	福井県立大学 経営企画部 連携・研究課 課長
江川 誠一	福井大学 国際地域学部 非常勤講師 産業実務家教員
橋本 洋子	パレットデザイン代表 仁愛女子短期大学 講師 産業実務家教員
大正 公丹子	福井県教育庁高校教育課 参事（地域人材育成）
内藤 俊治	坂井高等学校 校長
島田 克久	坂井高等学校 教頭

9 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（2022年4月1日～2023年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
坂井市 あわら市		運 営 推 進 委 員 会 開 催							企 画 研 究 発 表 会 の 参 加 ・ 参 観			運 営 ・ 推 進 委 員 会 開 催
福井銀行												
福井県												

(2) 実績の説明

運営・事業推進委員会を開催した。その際に管理者としてアドバイスをを行った。事業の実施に当たっては、実施校との共有を大切にして、意見交換をしながら進めた。実施校の事業推進に支障のないように県独自の「魅力化発信事業」と絡め、予算措置を講じることや、令和4年度に導入した学校設定教科「ふくい産業」の進め方にも指導と支援を行った。

様々な企業人の生き方、ものづくりの考え方を、企業への訪問研修や出前研修を通じて生徒たちに学んでもらうことによって、ふるさと福井への貢献並びに自己の well-being を達成してくれる人材の育成を目指している。

来年度は最終年度を迎え、持続可能を図るために、コンソーシアムの構築に着手している。教員の人事面に関する配慮も考えていきたい。令和6年度以降もこの事業がパイロット事業として継続できるように、予算の確保だけでなく、企業、市町との協働によるカリキュラムマネジメントも考えていきたい。

10 事業の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（令和4年4月1日 ～ 令和5年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
カリキュラム開発 （ふくい産業）	「ふくい産業」を実施 産業実務家教員による授業（別添1参照）											
コンソーシアム 構築に向けた準備	CEOを中心に各企業訪問と説明、参加企業の調整											
「学びに向かう指 標」開発	「学びに向かう指標～坂井高校スタンダード～7つの矜持」 開発・施行（別添1参照）											
企業訪問				地域企業研修（1・2年） グローバル研修（2年）の実施								
出前授業	企業人や高度技術者による授業を実施											
企画研究	3年各コースで実施 ※下記「企画研究による各コースの取り組み」参照											
運営委員会 事業推進委員会		開 催										開 催
成果発信、成果検 証、外部評価等	本校HP、マイスター通信、PR動画、PRパンフレットにて広報活動 企画研究発表会（中学生も参加）にて発信（12月） 運営・事業推進委員会にて指導アドバイスを頂く											

(2) 実績の説明

成果概念図にある内容を、今年度（2年目）はほぼ実施できた。

この事業での実績のとらえ方に関して、進学率や就職率のように明確な数値化は難しい。しかし、確実に生徒活動概念図の「根、幹、葉」にある一つひとつのことに教職員の議論、

共有化があり、その上で、企業・地域の方々そして何よりコース間を超えた生徒同士の協働という形となって実行されてきた。上記の企画研究での成果物だけでなく、1つひとつのグループによる課題研究が形となり成果を上げてきている。

特に、今年度後期から作成してきたPR動画作成における生徒同士の協働活動は、各コースの連携があり、その中で自らのコースの特徴をPRしたものであり、AARを繰り返し、生徒自らが成し遂げたものである。その中には企業との連携、自治体との連携も多く見られ、まさに総合産業高校におけるマイスター・ハイスクールの原点ともいえる活動であった。この企画を提供、支援した文部科学省には感謝をしている。生徒たちが絵コンテを書いて動画を創っていく過程、8コースのそれぞれの教員たちが自分たちのコースをPRしていきたいという思いなど、生徒および教員が自分たちの学校の取り組みをしっかりと伝えたいという共通認識ができた。プロの制作者と生徒たちが創りたい作品像を積極的に語るなど、まさにマイスター・ハイスクール事業が目指す学習であり、生徒の主体的な学習にもつながった。

これからの生徒の生き方や専門高校の在り方への影響の観点から実績を考察してみる。生徒の変容と教員の変容という面から捉えてみたい。

ア 企業との関り（産業の現場を見る、聞く、感じる、考える学び）

生徒活動概念図「幹」の中でも、中心的な事業として企業訪問がある。昨年度は11月に5企業しか訪問できなかった。今年度は延べ25の企業や8つの企業の出前授業講座を実施できた。グローバル研修も7つのコース（5企業1大学）において実施することができた。

生徒はすべての企業訪問研修・企業出前研修において、視点別にメモを取ることができるようにレジュメを用意し、それを基に振り返りのルーブリック評価を実施した。

①何か新しい発見や気づきがあったか

企業訪問に関して…91.8%

出前授業に関して…65.0%（専門分野）59.6%（専門外の分野）

②企業の、社会や地域における役割について理解することができたか

企業訪問に関して…よく理解できた（51.5%）ほぼ理解できた（43.4%）

③今回の研修は満足がいくものか

企業訪問に関して…大変満足（59.2%）やや満足（39.7%）合計91.8%

出前授業に関して…大変満足（70.9%）やや満足（26.0%）（専門分野）

大変満足（54.7%）やや満足（40.4%）（専門外の分野）

グローバル研修に関しても、①～③の中に入れて企業訪問という形の集計を取ったが、その研修だけを取り出すと①～③においてかなりの感動を得て、刺激をもらい満足しているようである。

生徒の声の中には、「学べる」「わかりやすい」「学びやすい」「SDGsはこのように実践されている」「知れる聞ける」「ありがたい」「他の分野とのつながりの大切さを知る」等が多くあり、現場を見て話を聞くことによる成長を感じる。なお、生徒だけでなく引率した教員の知見も広がるとともに、現代社会における企業活動に対して感謝する気持ちも醸成された。企業の方々、事前に学校から伝えた学習項目も踏まえて、緊張感をもって生徒たちを迎えてくれている。訪問等のお送りする生徒の感想には、企業としての使命感を感じてくれる声が多く、また気づきを素直に表現してくれているので企業側にはとても新鮮ようである。学校及び企業の双方に良い影響が感じられ、協働の成果を実感できた。

イ 1年全生徒を対象に、1単位の学校設定教科「ふくい産業」の実施

事業概要に書いたような趣旨で今年度は産業実務家教員が1年間、「ふくい産業」を実施してきた。先生方のすべての産業がビジネスあるいは観光に通じていること、ものづくりの仕上げはデザインに通じているという産業実務家教員の姿勢はどのコースにも伝わったと思われる。

観光に関連するビジネスコースの生徒や、デザインに関連する生活デザインコースにとっては、高校で学んでいることをさらに深められるという意味で、とても有意義な1単位であったと思う。ただ、それ以外のコースの生徒は、産業実務家教員の専門が中心の授業になってしまうことは否めなかった。この点の改善は「12 次年度以降の課題及び改善点」で記述する。

ウ 3年生が集大成として取り組む課題研究の交流会、企画研究発表会を実施

課題研究は、専門高校である坂井高校における卒業論文に値する専門分野の集大成である。マイスター・ハイスクール事業の指定前は、その課題研究の途中の状況や、その成果を他のコースの生徒が見たり知ったりする機会はなかった。昨年度は、全コースによる課題研究・企画研究発表会を行った。今年度はさらに課題研究の序盤あたりの6月に各コースがどのような研究をしているのかを知るため、相互に見学し、質問して交流する場を設けた。

交流会においては、他のコースがすごい研究をしているとの驚きの声が上がると同時に、もっとゆったりと他のコースが行っていることを知りたいという声が上がった。身近な友人が、専門的な研究内容に取り組んでいることに触れ、大きな刺激を受け、向学心に火をつけた生徒もいた。

12月に実施した企画研究発表会においては、全校生徒が3年生の代表的な研究を視聴した。この発表会の満足度は、満足以上 3年生(91.5%) 2年生(96.8%) 1年生(90.3%)であった。

生徒たちの一部は、自らが一番希望するコースに入学できていない状況もあるが、その中で他コースの研究を見ることにも大きな意義があった。アンケートでは「とても興味を持った」が全学年平均63.0%、「自分の研究に生かせる」が37.0%、「これからの自分の課題研究への意欲につながる」が36.0%、となっている。地域、保護者、企業の方からも総合産業高校の各コースの研究レベルの高さ、地域との協働による生きた研究、コースを超えての協働による成果、そして何より子供たちが自分たちで運営し、楽しそうに発表し、真剣に聞いている姿に共感する声を頂いた。

(企画研究は課題研究の中で、マイスター・ハイスクール事業の予算をつけた研究)

エ マイスター・ハイスクール事業を支える学校改革

「学びに向かう指標」坂井高校スタンダード～7つの矜持～が、今年度完成した。「自主・協働・創造」の校訓をベースに置き、7つの項目を矜持もってしっかりやり遂げていこうとする、行動目標である。改めて校訓を身近に置き、全生徒全、教職員がコースを問わず高め合う評価項目となっている。

この「学びに向かう指標」グループには、生徒指導部やカウンセラーの教員も入り、この学校のSWOTも出し合い、何回もの会議の末にまとめたものである。

広報に関しては前段で触れてきたが、マイスター通信を今年度も5号(通算で9号)発行できた。地域に配布する中で、店内に大きく数枚の通信を掲示してくれているところもある。今年度の新入生の中には、この広報紙を見て入学した子も数名いると聞いている。この広報紙に関しては広報グループが担い、様々な活動のどれを取り上げようかと話し合っている。そういう雰囲気も生徒の活動をたたえる振り返りになっている。

生徒には、1つ1つの取り組みに対して、集中を保つため、また見学のポイントも示唆する意味も込めてメモを取らせている。生徒はそれを基に Google Form より、振り返りの評価を行う。それによって変容を見ているが、常に振り返りを行っていくことが定着してきた。

※企画研究による各コースの取り組み（4月～1月での取り組み）

コース	タイトル	内容、展望
ビジネス	坂井高校生と幸福度連続日本一の謎を探る冬の午後旅『ぶらり坂井』の開発	東京三田国際学園中学校との協働学習からヒントを得て、坂井市ふるさと納税返礼品として冬の市内半日バス旅行を企画開発した。坂井高校ブランドを活用したアイデアは、県ビジネスアイデアコンテスト最優秀の受賞にもつながった。生徒は2月8日実施に向けてガイド練習も行ったが、申込者数が最少催行人員に満たなかったために、実際のツアーは実施できなかった。
生活デザイン	Sea 級グルメレシピ開発	昨年度から堺市と連携して「Sea 級グルメ」のレシピ開発を行っている。今年度は新しくなった三国港市場での試食会に向けて昨年度開発されたレシピの改良、新しい料理の開発を実施し、一般の方々へのお披露目もできた。今後は、三国港市場で活動されている「おかみ会」とのつながりを深め、生徒たちが考えた「Sea 級グルメ」を三国湊でなじみある料理にしていこうと考えている。
機械	焼きごての製作～丸岡城の国宝を願って～	授業や実習で学んだことを地域のために何かできないかと、3年前から焼きごての製作を続けている。坂井高校食品コースが製造したお菓子里に焼き印を押して販売する学校内での連携から始まった取り組みである。その後には坂井高校とつながりのある地域の方々とのコラボレーション企画として活動してきた。今年は丸岡町の「一般社団法人 丸岡城天守を国宝にする市民の会」の方々との企画を進めてきた。企画を通して、技術の向上だけではなく、地域のことを知る良い機会になった。
自動車	ミニ北陸新幹線の製作と活用～課題研究作品を通じた地域貢献～	ものづくりや自動車整備の知識を生かして、「動くもの・校内で役立つもの」をテーマに課題研究に取り組んでいる。その中の1テーマとして、2010年からミニ鉄道の製作をしている。 昨年度末に、北陸新幹線かがやきタイプの車両が完成した。その車両を使って今年度6月に丸岡バスターミナルでイベントに参加した。その中で今年度行う改良点を検討し、最も荷重を受ける台車部分の新規製作を今年度の目標に設定した。イベントを通して課題研究作品の改良点を発見するだけでなく、取り組みを知ってもらうことでものづくりの楽しさや技術の高さを伝えられた。
電気	温泉熱の利活用～地域と校内コースの特色を活かした持続可能な取り組み～	本校の近くに位置するあわら市の天然足湯施設を管理しているあわら市観光協会の協力のもと温泉熱を利用・活用することによる地域と校内のコースの特色を活かした持続可能となる取り組みを提案した。 ペルチェ素子を用いた専門分野における発電の取り組みはもとより、地熱資源を活用した農作物の栽培期間の短縮や年間を通じた農作業従事の可能性、採取した農作物を利用した地元グルメの開発や蒸気染めによるファッションデザイン、北陸新幹線開業によるビジネスチャンスの活用などを他コースとの協働で実現したいと考えている。

情報システム	地元いちご生産者との出会いから挑戦へ	地元イチゴ生産業者 ICHIGOOJI との出会いから研究が始まった。プログラミングを通して、生産現場の問題を解決し、スマート農業について深く考える中で、AIの研究にも取り組むことが出来た。また、企業との連携により、本校農業コースの生徒が使用する『農業のプラットフォームアプリ』を手掛けることもできた。農業コースと連携したこのアプリを利用することで、農業への興味や新規就農者の増加にもつながる取り組みとなることを目指してきた。
農業	サステイナブルな農業からサステイナブルな未来構築へ ～絶滅危惧種の保全活動とSDGs 活動を通して～	福井県立大学の吉岡教授と福井大学の奥野教授との高大連携事業から本校が所在する坂井市の絶滅危惧種アゼオトギリとエチゼンダイモンジソウの保全活動を始めた。この活動をSDGs 活動と位置づけふくいSDGs パートナーに申請し登録された。板倉みどりクラブと連携し、水田の雑草アゼオトギリの種の保存を行い、こどもの森運営委員会と連携しエチゼンダイモンジソウの増殖と木育ガーデン study に移植を継続的に行っている。この活動からサステイナブルな農業を考え、さらにサステイナブルな未来構築へ繋げていきたいと考えている。
食品	もったいないから美味しいへ～地域とつながる食品ロス削減を目指して～	地域資源活用の取組として、これまで「もったいないから美味しいへ」をテーマに掲げ、規格外・廃棄農産物の活用を目指して活動を繋げてきた。坂井市と連携し、食品ロスの低減につながる安心安全な商品開発に取り組む中で、地元の協議会より日本酒を製造する際に出て大量に廃棄されている酒かすの活用依頼があった。現在は、酒かすを活用した新商品の開発に取り組み、開発した「酒かすシフォン」や「酒かす栗あんぱん」を地域イベントや本校開催のマルシェで販売している。地元から食品ロスの低減を目指し、地域に求められ貢献していける活動のバトンを、後輩へ繋げていく。

1.1 目標の進捗状況、成果、評価

事業名「学科横断型DX研究による次世代産業人育成体制の構築」の目標として「地域の課題と地元企業の価値を理解し（この中にDXは当然含まれている）、持続可能な次世代の地域産業を担う人材の育成」を掲げている。その根底には、地域に愛され、貢献できる高校であり続けるため、そして何よりその目標が生徒のWell-beingに寄与できると考えているからである。

その目標の進捗状況は上記に述べた実績から見て道半ばであるが、すべての活動を通して、生徒にも教職員にもマイスター・ハイスクール事業への認識と理解、そして実施催事に対する協力が得られてきた。1年目が終わった頃は、新型コロナの影響もあり、計画を立てても空回りをしている感がぬぐえなかったが、今年度はすべての計画を実行したことにより、生徒からも教職員からも一定の共通理解を得られるようになってきていると感じる。

マイスター・ハイスクール事業は型があるものではない。すべて既存の教育の上にクリエイティブにやっていかないといけないものである。時に既定のものを壊していかないといけない。したがって何を目標しているのかどこまでやればいいのか一人ひとりの生徒や教員には見えないところがある。したがって成果というところ、一つひとつの催事の成功と生徒の声による変容である。その集合体として、令和4年度実践報告書がある。

また、この成果に対する本物の評価となると地域の方の声、企業の方の声そして励まし、中学生の本校を希望する志願状況が挙げられる。12月17日に行われた企画研究発表会における地域の方や保護者そして企業の方の声からは活動への高い評価が得られた。このように8コース全体が集まって研究発表会が開かれることへの賛意も寄せられた。企業の方から

はレベルの高さに感心する声もお聞きした。また、生徒自身がその発表会を運営していることから主体性や積極性などの資質向上にもつながる取り組みであるという認識を持たれた方も多い。生徒自身が主体的に取り組み、何かを仕上げていく、そのことがいかに生徒を成長させ、好感をもって評価されるかということである。学校祭が顕著な例であるが、このような産業にかかわる分野でも生徒自身によるイベントがあっという。コンソーシアム構想に関しても企業の方は極めてよい構想だと評価されている。そして、今年度の高校入試に関する中学生の志願者は昨年度を大きく上回っている。

1.2 次年度以降の課題及び改善点

人が代わっても継続していける価値のあるものとしての認識不足、そしてどれくらいの労力がかかるのかの不透明さ、それらが明確に見える形に示されていないことが、新たな事業を進めるにあたっての障害となる。そのために今年度からコンソーシアムの構築を着実に進めている。これを中心に令和6年度から、自治体の応援を得て「コンソーシアムを活用した専門教育の充実」という観点で、マイスター・ハイスクール事業を継続していきたいと考えている。坂井市とあわら市の2つの自治体の担当部署への説明は行うことができ、趣旨には賛同いただけている状況はあるが、予算等の考え方には厳しいご指摘も伺っている。

CEOや産業実務家教員は非常勤であり、他に主たる仕事を抱えている。年ごとに、勤務の制約が多い状態になってきている。したがって令和6年度を見越して学校の中で事業を展開していける体制の構築も急務である。令和6年度からの持続可能な体制を令和5年度から構築していかなければならない。この2年間の取り組みの状況を振り返り取捨選択して立案していく。まずは、令和5年度は、各コースからマイスター・ハイスクール事業の事務局担当者を決め、その中の2名を中心となる事務局員としてこの事業を統括する業務を担当してもらうことで今後の事務局の方向性を見極めたい。

また、学校設定教科「ふくい産業」において、講師を外部の産業実務家教員だけに求める発想から、校内で「ふくい産業」が運営できないか検討してきた。その結果、8つの専門コースの教員が違うコースで授業を行うという視点を持ち、生徒たちに他の専門コースに関連したふくい産業の現状と課題についても学習する機会を持たせたい。

さらに、令和5年度からのコンソーシアムの企業を活用して、企業人と創るワークショップの授業を考えている。今年度は2つのコースで試行し、教員からは高い評価を得られた。一方、生徒たちの方でも楽しむことができる授業になったようである。

「ふくい産業」は、来年度はこれらの取り組みを加えながら持続可能性を高めていく。そして、令和6年からの自走を目指していく予定である。

「学びに向かう指標」として、本校の生徒たちに最低限身に付けて欲しい姿勢の内容も固まり、来年度、その周知・活用も始めていく。この内容は毎年見直していく必要があるが、根幹である「学びの姿勢」をこのマイスター・ハイスクール事業の総合産業高校としての改革のレガシーとして全教職員と全校生徒が意識して定着するように目指していきたい。

また、文部科学省の支援を受けて作成したPR動画やPRパンフレットも各方面で活用して、本校の取り組みに理解と協力を得られるよう広報活動にもあたりたい。

本校がこの事業を通じて地域から意見や支援を得て、喜ばれる学校になるように、AARを常に回し続けるように取り組んでいきたい。